

現場訪問 — ●親子バイクスペシャル ファミリー耐久コンペティション

限られた燃料でどれだけ長く走れるか 親子のチーム対抗で競う



スタート前に雨が降ったため、ウェットコンディションでレースがスタート。速度は出ないものの白熱したレースが展開された

ホンダの交通安全センターでは小学生とその親を対象に、バイクを運転する体験を親子で共有することで交通安全の基本を学び、親子の絆を深めてもらうことを目的に「親子でバイクを楽しむ会（以下、親子バイク）」を開催している。鈴鹿サーキット交通安全センターは一昨年から、この親子バイクのスペシャル企画として、「ファミリー耐久コンペティション」（通称「エコ耐」）を実施。これはガソリン300ccで指定されたコースを親子で交代しながら走行し、制限時間90分でどれだけ長い距離を走れるかをレース形式で競うものである。親子バイクの受講経験のある親子2人以上が1チームでエントリーできる。発案者で



インストラクターがメスシリンダーでガソリンを正確に計測して各チームに配給

ある同センターの中道直樹インストラクターは「安全に加えて、環境問題やエコ運転についても親子で話すきっかけにしてほしいと企画しました」と話す。毎回多くの参加申込みがあり、参加者からも好評だったため、2014年度は全4戦でシリーズチャンピオンを決めるというレギュレーションを導入。その第1戦が5月5日に行われた。

この日は14チーム（大人14名・子ども18名）が出場。競技に使用するバ



親子で事前に打ち合わせた周回数でピットに入り、ライダー交代を繰り返す

イクは、ホンダのCRF70またはCRF50で、1台の車両を親子が交代で運転する。午前10時30分から始まったオリエンテーションでは、中道インストラクターが走行ルールを親子に説明。途中でガソリンが無くなり、走行ができなくなった場合、ピットに戻れば1回（50cc）のみ給油が可能だが、周回数から7周が引かれる。指定場所では追い越しが可能だが、それ以外の区間ではペナルティが科せられる。公式練習を経て、午後2時30分に決勝レースとなった。スタートライダーは全チーム、子どもが務める。ガソリンを減らさないように、1周約700mのコースを低速で慎重に走行した。そして、子どもから親にライダー交代。大人は追い越し可能区間で前車を抜こうとついついアクセルを開けてしまう。途中でガス欠になり、ピットで給油を申請するチームが続出。4時にレース終了を示すチェ



44周を記録し、総合優勝した伊藤祐樹くん（写真左）と芳樹さん（写真右）

ッカーフラッグが降られた。表彰式では50ccクラスと70ccクラスの上位3チームに表彰状が手渡された。第1戦の総合優勝は大坂から参加した伊藤芳樹さんと祐樹くんの親子チーム。祐樹くんは「なるべく急な加速をしないように、アクセル操作に気をつけて走れたのが良かったと思います」とと勝因をあげた。「どうしたら燃費を上げられるか、子どもとの作戦会議も楽しかった。シリーズチャンピオンをめざして、次戦以降も参加したいと思えます」と父親の芳樹さんは感想を語った。

チェッカーフラッグの合図でレース終了

ガス欠になったチームは1回のみ給油が認められる



ピットの出口では後方の安全を確認してからコースに合流するように徹底された

NEWS REVIEW

1 ●警察庁 春から初夏にかけて増加が目立つ 自動二輪車の交通事故

警察庁は4月、春から初夏にかけて増加が目立つ交通事故の特徴と対策についてまとめた。この中で、過去5年間（平成21～25年）の自動二輪車乗車中の死者数は4月から6月にかけて増加しており、年齢層別では16～24歳（24.4%）、40～49歳（21.7%）、30～39歳（19.2%）の順に多くなっていることが報告されている。また通行目的別では、ドライブ目的が増加し、土曜日・日曜日は平日の約2倍になっている。警察庁交通局企画課の柴田互課長補佐は「春から初夏にかけての死者数の増加傾向は、週末に趣味としてバイクを利用するライダーの事故が影響しているも

のと考えられます。死者数の月別推移を見ると、7月以降も少なくなっているわけではありません。特に、若者や中高年齢層のライダーの方々はツーリングへ行かれる際、疲れる前に休息をとり、安全運転を心がけてほしいと思います」と話す。

こうした二輪車の事故を防止するため、Hondaは全国の交通安全センターや二輪販売会社が開催しているバイクのスクールを通じて、ライダーへの安全運転教育を実施している。昨年からは、より多くのライダーが気軽に参加できるHondaレクリエーションプログラムを開始するなど、ライダーの更なる安全意識の向上を図っていく考えだ。

2 ●平成25年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式 様々な交通問題に関する研究成果を発表



4月11日、経団連会館・ホール（東京都千代田区）で「平成25年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式」が開催された。研究調査報告会は、平成25年度に成果が明らかになった研究プロジェクトの中から①「ラウンドアバウトの社会実装と普及促進に関する研究」②「持続可能な開発のための教育（ESD※）を通じた安全教育の実現に関する研究」③「睡眠障害スクリ

ーニングの普及推進を目指した学際的研究」④「『天下の公道』と生活道路に関する研究～ソフトライジングボラードの実用化に向けた運用上の課題とその解決方法～」の4テーマが発表された。

②では北村友人・東京大学大学院教育学研究科准教授が学校現場ならびに地域社会と連携しながら、交通・生活・災害を総合的に捉える安全教育のあり方を検証。さらに、新しい教育のアプローチである「持続可能な開発のための教育（ESD）」の概念を踏まえて、小・中学校において「地域安全マップ」などの作成を行う安全教育を行った。その結果、「交通安全」の領域から安全教育を導入す

ることが最もスムーズに実施できることが確認できたと報告した。

35回目となる国際交通安全学会賞の表彰も合わせて行われ、業績部門では京丹後市と丹後海陸交通（株）による「現状に即した合理的な地域公共交通の再生—京丹後市における行政と事業者との協働による上限200円バス等の取り組み」、飯田市による「飯田市の並木を軸とする都市・交通空間の再構築の取り組み」が受賞した（著作部門、論文部門は該当者なし）。



※ ESD = Education for Sustainable Development